

心の港となってしまいました。

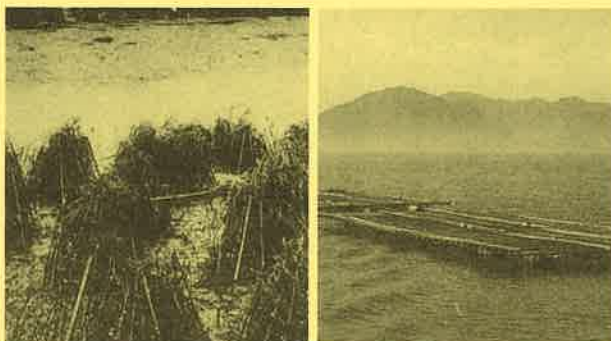
大正時代の終わりごろには、宇品港を商業などにも十分活用したいという願いが高まってきました。そこで新たな埋め立てを行って、宇品港の西側も港として利用できるようにすることになりました。

昭和時代になると、大規模な工業用地と港を建設しようとする計画がもちあがりました。この計画は、広島工業港建設計画とよばれ、太平洋戦争中に吉島・江波・観音沖が埋め立てられて、大きな工場などがつくられました。戦後は、商・工業用地だけでなく、住宅用地なども合わせて作りだそうとする西部開発事業が行われ、庚午・草津沖が埋め立てられました。また、この他にも多くの埋め立てが行われました。



西部開発事業地
広島市広報課提供

変化したカキ養殖



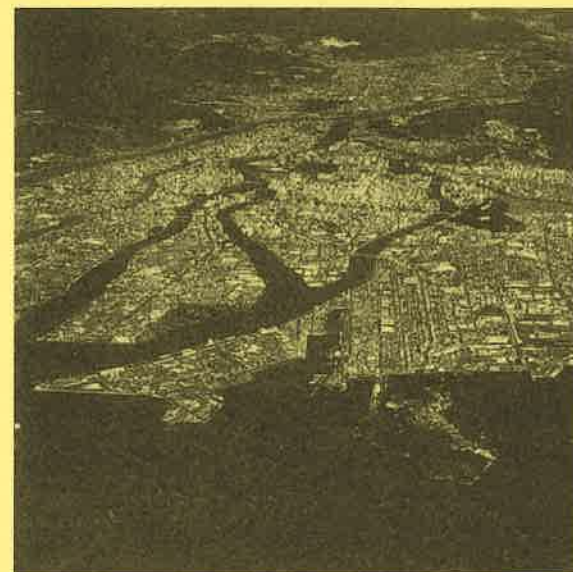
干潟で行われていたカキ養殖 沖合で行われるようになったカキ養殖
南区 原 克司氏提供

海辺の開発は、商業や工業など多くの面で広島が大きく発展していく基礎となりました。しかし、干潟を利用して行われていたカキ養殖などからは、大切な漁場を奪っていきました。

このようなきびしい状況のなか、カキ養殖においては、養殖技術に工夫が重ねられました。昭和の初めには、筏を利用する養殖方法が考案されました。これは、干潟ではなく沖合でカキを養殖するという画期的な方法でした。戦後、この方法に改良が加えられて、あっというまに普及しました。漁場を干潟から沖合へと移したカキ養殖は、生産高を大きく増やしていきました。

学習の手引 第18号

広島 海辺の開発の歴史



広島湾
広島市広報課提供

広島市郷土資料館

☎734-0015 広島市南区宇品御幸二丁目6番20号

☎(082) 253-6771

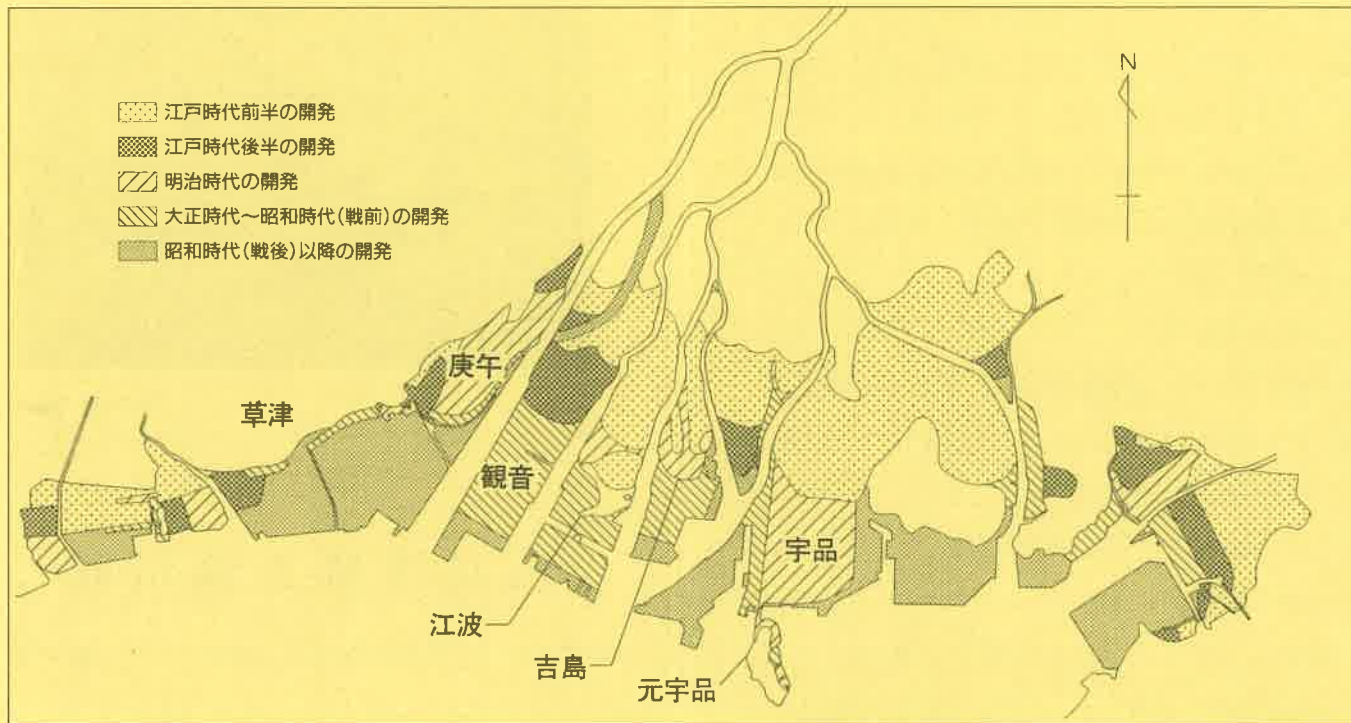
城下町広島誕生

16世紀の終わり、毛利輝元は、小さな村が点在するほかには遠浅の海が広がっているだけの太田川の河口に、城をつくる決心をしました。砂地の上に堤防をつくり、地面を固めることから始まる大変な工事が行われ、城ができ、町がつけられました。これが、城下町広島のはじまりです。江戸

時代になると、城下町の先に広がる遠浅の海の開発が進められ、新しい土地が誕生していきました。

その後も、広島は海にむかって成長しました。海辺の開発は、商業や工業はもちろん特産のカキの養殖などの発展に、大きな影響を与えました。

広島発展の歴史——それは、海辺の開発の歴史でもあるのです。



広島の新開地発達概略図



宇品港
広島市公文書館提供

都市の発展

明治時代になると、日本は近代的な産業をおこして工業力を強める政策をすすめました。そのようななかで、県令（今の県知事）として千田貞暁が広島にやってきました。彼は、広島をより発展させるためには、大型の船が利用できる港を建設する必要があると考えました。当時、遠浅の海が広がっていたために、大型の船は船着き場へ直接入ることができなかったのです。そこで、広島沖に浮かぶ宇島島（現在の元宇品）までを埋め立てて地続きにし、宇品港が建設されました。

しかし、明治27年（1894）に日清戦争が始まると、宇品港は兵隊を送り出す港として利用され、それ以降は、軍事利用が中